

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

東証1部24銘柄で

らくらく2倍の
低位株
選別投資術

林知之

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

本書は、原則として、2018年4月の情報に基づいています。
また、投資の判断は自分自身の責任において行ってください。

はじめに

「制約」が「自由」を生み出す

多くの個人投資家の行動は自由すぎる。それが、株式投資で儲からない根本的な要因のひとつだ。

上がる理由を見つけては銘柄を仕込むのだが、インターネットの情報だったり、友人が手がけている銘柄だったり、配当利回りに目をつけた買いだったり、値動きを見ての短期狙いだったり……。

自由に行動した結果、コントロールが効かなくて塩漬けをつくる。少ない残り資金でヤリクリするが、どうしたって息苦しい。常識的なオトナ、立派な社会人が、こんな状況にあるのだ。

一方で、プロ投資家たちは、行動をコントロールしている。その差を生む大きな要因に、行動の「制約」がある。与えられた自由をそのままにしたら、だらしなくなるのは必然。塩漬け投資家は、そんな残念な落とし穴にはまっているだけなのだ。

自由に、いろいろな銘柄を手がけたい——そんな趣味的な気持ちを満足させながらも、プロと同じ売買を展開する方法が、この本で紹介する低位株の選別投資である。

株式市場に秘密はない

「人の行く裏に道あり花の山」——利益のためには他人が選ばない道を進め、という意味の相場格言だが、こんな言葉を持ち出して「わかりますよね？」と幕を引いては、いささか不器量であろう。

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

株価が高いときは皆と一緒に買いたくなり、安いときは皆と同様に不安になるものだ。人気銘柄が動意づけば、どうしたって気になる。「大衆の逆をやらないと儲からない」と考えるが、大衆の一人にすぎない自分が、どうやって真逆の感覚をもてばいいのか……格言に頼っても正解にはたどり着かない。

だが、論理的に「制約」を設ければ、思考はラクになる。

まずは、日替わりの銘柄情報を、まともに評価しないことである。あまり好きな言葉ではないが、一般投資家を「勝ち組」と「負け組」に分けた場合、負け組の共通点は“情報弱者”であることだ。

情報の発信者は、自らが不利になることは避ける。競争社会では必然的に、受信者が不利になる。

安直に「儲けたい」と切に願う投資家ほど考えない、つまり、自ら情報をつくり出さないから、受け身の姿勢の情報弱者だ。だから賢い情報屋は、次のような論理で行動する。

彼らをターゲットに、誰にも明日の価格すらわからないという事実には触れず、あたかも知っている、相当な確率で当てることができる、と錯覚させるような情報を発信すれば、「ここに秘密の答えがありそうだ」と反応してくれる。

投資家が、いったん受け身の姿勢になると、“お化粧”だけで売る情報の表面的な面白さにはまり、常に新しい情報を心待ちするようになる。そして、どれが表の道で、どれが裏の道だかを考えることさえ難しくなってしまうのだ。

狙いを定めると精度が上がる

投資情報の構造を理解して、「儲かりそう」なだけの情報や、秘密めいた情報が気にならなくなると、株式市場の状況を冷静に観察することができる。

「上がるだろう」「下がるだろう」……専門家と称される人たちが語るが、それほど当たってはいない。「自分だけが儲かればいい」と考えて自由に競争する場で、真剣に買いたと考えている参加者と、確信をもって売りたいと決断した参加者がいて“価格がついている”のだから、そもそも当てようと躍起になるのが間違っている。

その状況下でプロたちは、守備範囲を絞ることで迷いを絶ちきり、コントロールされた売買を実現している。得意な戦法だけに絞り、その戦法が機能するであろう特定の場面に狙いを定めるのだ。

考えてみれば、私たちが仕事や趣味で培った常識的なことなのだが、“おいしい”においの情報に目を向けたとたん、忘れてしまうのだ。やはり、ガイド役となる真実の情報が必要なのである。

本書で紹介するF A I投資法は、低位株に的を絞った選別投資法だ。「いろいろな銘柄を買って持つ」という、ごく一般的な投資法ながら、きわめて実践的な29項目のルールが常に正しい方向に導いてくれる。

40年以上前から林投資研究所が提唱している、長期トレンドを基準とした現物投資の王道、実績に裏付けられた運用哲学をベースに体系化された真の投資理論にぜひ触れてみてほしい。

2018年6月

林投資研究所代表

林 知之

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

東証1部24銘柄でらくらく2倍の低位株選別投資術◎もくじ

はじめに

序章 概要

過半数を億トレーダーに導いた化け物	11
1. 7億円を手にした男	12
2. 倍化する銘柄を選定する投資法	14
3. 月足チャート	15
4. F A Iクラブの誕生	16
5. 投資クラブについて	17
6. 実行する投資法はひとつだけ	18
7. 好き嫌いで選べばいい	20

1 章 基本

月足観測をもとにした現物投資の王道	21
1. 低位株投資の有利さ	22
2. 月足チャートの重要性	23
3. 売買技術がすべて	24
4. 売買技術とは	25
5. 狭い分野に徹すること	27
6. 場帳を使う	29
7. 直接法と間接法	32
8. 日足チャート禁止	33
9. 相場の確率	38
10. 最高で 24 銘柄	39
11. 株数は均一に	40
12. 資金の余裕	41
13. 心のゆとり	43
14. 玉帳による資金管理	45
15. ほかの資産との分離・分別	48
16. 注文は、必ず寄付の成り行き	49
17. 売りを意識しろ	51
18. いつ売っても利益	53
19. 損切りについて	54
20. F A I 投資法の損切り	55
21. 大失敗の修正と予防	56
22. 強制的な手仕舞い	57
23. 荒れたら手を引け	59
24. 手を荒らすな	62
25. とにかく資金をとめないこと	64
26. 利益率を高める試み	65

2章 規定

実践者の感覚を重視した29のルール	67
FAIルール	68
付則	70
1. 3段下げ	71
2. 底	72
3. 三角形	73
4. 十字	75
5. 5連続陽線	78
6. 単独の兆し陽線 (1)	79
7. 単独の兆し陽線 (2)	80
8. 確認ライン (1)	82
9. 確認ライン (2)	83
10. 下げ止まったか、まだか	85
11. FAIの会社内容分析とは	87
12. 経常30%以上の増益	88
13. 1株あたり純資産	88
14. 人員整理	89
15. 裸値	90
16. 安全第一	92
17. 中段の揉み	93
18. 新高値をつけたら	98
19. 大商い=目先の天井	100
20. 3段上げの値幅	101
21. 3段上げの期間	104
22. 先導銘柄	107
23. 3段上げ	107
24. 傾向が変化する前兆	111
25. 傾向の変化がすべて	113

3章 実践

初心者でもマネできるバスケット投資術	115
1. 売買の核心となる「利食い」	116
2. 買う対象は「買い銘柄」のみ	119
3. 場帳は「買い銘柄」だけつける	120
4. 24銘柄以内で均一に分散	122
5. 分割売買	123
6. 月足	124
7. データスリップ	124
8. 実践の段階	126
9. 実際に売買する銘柄をどう選ぶか	128
10. 練習売買	128
11. 玉帳によるポジション管理	129
12. 利食いのタイミング	130
13. 買い直し	131
14. 「売り」に関するルールについて	132
15. 配当についての考え方	133
16. 手仕舞いの理由を積極的につくる	135
17. 玉帳のつけ方	136
18. 目標達成銘柄について	142
19. 「月曜日の新規売買禁止」について	143
20. 低位株の新基準	148

4章 実績

低位株選別投資の実力を徹底検証	159
1. 「ない」という選択肢をもて！	160
2. でも「ある」のです	161
6319 シンニッタン～選定時の解説	162
6319 シンニッタン～選定後の値動き	164
5957 日東精工～選定時の解説	166
5957 日東精工～選定後の値動き	168
8095 イワキ～選定時の解説	170
8095 イワキ～選定後の値動き	172
5301 東海カーボン～選定時の解説	174
5301 東海カーボン～選定後の値動き	176
5358 イソライト工業～選定時の解説	178
5358 イソライト工業～選定後の値動き	180
6958 日本 CMK ～選定時の解説	182
6958 日本 CMK ～選定後の値動き	184
6507 シンフォニアテクノロジー～選定時の解説	186
6507 シンフォニアテクノロジー～選定後の値動き	188
5357 ヨータイ～選定時の解説	190
5357 ヨータイ～選定後の値動き	192
8093 極東貿易～選定時の解説	194
8093 極東貿易～選定後の値動き	196
9854 愛眼～選定時の解説	198
9854 愛眼～選定後の値動き	200

あとがき

序章

概要

過半数を 億トレーダーに導いた 化け物

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

本章では、実践者 138 人中、1 億円を達成した人が 71 人、そのうち 10 億円を達成した人が 11 人という、まさに驚異的な実績を残した投資法の概要を説明する。

この投資法（F A I 投資法）は、下げきった低位株からラクラク 2 倍に値上がりする銘柄を発掘して投資し、確実にものにする。

株式投資で、いちばん単純でやりやすい方法は「これから上がる銘柄を買う」ことだが、実際に当てるのは至難のワザだ。F A I 投資法は 29 の明確なルールで、これを実行可能にする。

1. 7億円を手にした男

ある男が、1,000万円の資金を5年で7億円にした。高いレバレッジを効かせた短期売買ではなく、地味な現物株投資を実践した結果だ。

この男は、大阪のとある団体で資金運用の方法を学んだ。それまで20年近くも株式投資をして全く成果が上がらなかったのだが、新しく学んだ投資手法で60銘柄ほどを手がけた結果、1銘柄も損をせず、地道な現物投資の繰り返しだけで驚異的な数字を達成したのである。

この投資手法は、1958年～60年ごろ、あるユダヤ人とその団体に所属する数人が、日本の株式市場を3年がかりで徹底的に分析して開発したのが始まりといわれるが、このあたりのことはハッキリしないし、そんな“衣”はどうでもいい。団体に所属する大勢の人が、実際に株式投資で大きな成果を上げた、というところが重要なのである。

記録では、16年間に売買した138人中、資産1億円を達成した人が71人(51.45%)、その中で10億円を達成した人が11人(7.97%)。当初の資金には個人差があったが、最低は100万円、多い人でも2,000万円程度だったというから、驚異的な数字である。

売買したメンバーのうち、1億円達成者71名以外は途中で脱落した。2名が亡くなったので、実際の脱落者は65人である。1億円達成の数字は驚くべきものだが、脱落者も非常に多いわけだ。

この手法こそ、本書で解説する「F A I投資法」なのである。ではF A I投資法とは、それほどつらく苦しいものなのだろうか。

否！ 売買のルール、とくに「銘柄選定のルール」が確立されてお

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

り、誰でもカンタンに実行できる投資手法である。

個人的な売買能力（技能）は、それほど要求されない。といっても、最後は個人の対応力で成否が決まるのだが、やさしい売買法を実践するうちに、自然に個人的な能力が身につく、ムダのない筋道が最初から示されているという特徴がある。

では、その団体に65人が脱落した理由は、いったいなにか。

脱落の原因は、ふたつに分かれる。ひとつは精神的なものである。

売買を続けるうちに、資金が着実に増えていく。高度な売買技術が身についた実感がないのに資金の増え方が急激だったせいだろうか、ノイローゼになる人が多かったという。

この話を聞いて「自分は大丈夫だ」と考える人が多い。だが、実際に億単位のカネを持ったことを想像してもらいたい。年齢が高いほど、また守るべきものが多い人ほど、順調に増える投資資金が根拠のない不安を生み、次第に増幅していくものだ。

さて、脱落のもうひとつの原因は、売買そのものである。

きちんとした売買を実行すれば、自分の意思に関係なく売買を手控えざるを得ないときがある。相場が相手である以上、当然のことだ。

実際にF A Iクラブ（後述）でも、1989年から2000年まで買い銘柄を選定しなかった。この時は「大きな下げ相場だ」と判断し、それが見事に当たったのだが、相場環境によっては注目すべき銘柄が絶対的に少なくなることがある。そういうときに、物足りなさから余計な売買に手を出して自滅していった、ということである。

売買の頻度が高い方法は——そもそも「方法」として適正なのか、という疑問はあるが——攻めすぎて、いつか“ドボン”する。出動の

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

チャンスを絞る手堅い方法は、その真の価値を理解する前に守備範囲を逸脱して迷走する……。この業界の、構造のようなものだ。

- ・ カネを儲ける前に、カネを持てる器量をつくる
- ・ 自分の決めたことを徹底的に継続して守る

陳腐な精神論に聞こえるかもしれないが、大切なことである。

2. 倍化する銘柄を選定する投資法

F A I 投資法は、低位株を対象とする。ただ単に値の安い銘柄を対象とするのではなく、選んだ銘柄がまずは2倍になることを目標とする手法である。この場合の「手法」とは、売買法というより、銘柄選別法といったほうが正確である（もちろん、売買法もきちんとルールによって確立されている）。

東証一部銘柄から銀行、ガス、電力を除いた全銘柄を、価格帯によって3つに分ける（高いほうから値がさ株、中位株、低位株）。この低位株から、ラクに2倍になりそうな銘柄を選定して売買するのだ。

低位株の有利さは、①下げにくい、②上昇したときの効率がよい、③心理的に買いやすい、ことである。一方で、数多くの銘柄の中で安値に放置されている理由があるわけで、倒産する銘柄は低位株から出るものだ。倒産しないまでも、安値の^{もちあい}保合が長引けば気持ちを持続できないし、そもそも投資効率がわるい。この欠点を補って長所だけを引き出すのが、F A I 投資法で規定された29項目のルールである。

選定メンバー（後述）全員が規定の月足チャートとファundamentalの資料（データスリップという）を使い、系統立ってまとめられた

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

ルールによって銘柄を絞っていく。多くの人間が同じ物差し（基準）をもって議論することで、相場で最大の敵である「独善性」を廃し、間違いのない答えを導き出す。そして、実践を通じて正しい感覚を蓄積することが、将来への道をつくっていくのだ。

ちなみに、将来の高値は予測不能、かつ予測者の努力が及ばない。だから、投資関連情報の「目標株価」なんて、無責任でバカバカしい限りだが、安全性確保のために「ラクに倍化するものを選ぶ」ことは、実践者として当然だ。「最低でも2倍」という銘柄選定基準を明確にする意味で便宜的に「目標」と定め、本書でもそう表現する。

3. 月足チャート

F A I 投資法では、月足チャートを使用する。月足チャートは長期の上げ下げを見るのに非常によい。株価のサイクルは、投資家が想像する以上に長い。上げ相場と下げ相場がそれぞれ1～3年、底練りが2～3年、合計すると5～10年がひとつのサイクルなのだ。

その大きな流れをつかみ、底値圏から上昇に向かう有望銘柄を探し、多少やり方がまずくたって大ケガせずに資産を増やしていく、それがF A I の手法だ。まずは、長期のチャートが必須なのである。

月足チャートは、形や型（かた）が出現しやすい。形・型とは、株価の先行きを見るために、足を集合体としてパターン化する捉え方である。よくあるのは、天井圏の三尊や、保ち合いながら小動きになる三角形などである。月足は、株価のサイクルに合っており、週足と比べて形・型が出やすいのだ。

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

F A I 投資法は目先の形・型を頼りに売買する方法ではなく、長期のトレンドを合理的に判断するやり方だが、銘柄選定や選定後の売買において形・型を重視する。F A I のバイブルである 29 項目のルールも、月足チャートの形や型について述べたものが多い。

4. F A I クラブの誕生

大阪の団体で行われていた投資法を引き継いだのが、林投資研究所が主宰する F A I クラブである。その経緯を述べておこう。

まず K 氏という人物がいた。この人は以前、中小企業を経営していたが小豆相場で失敗、その時に林輝太郎が相談に乗ったが、すでに手遅れの状態で会社は倒産した。その後、ビルの清掃会社に勤務し、仕事の現場であるビルに拠点を構えていたのが、前述の大阪の団体だった。たまたま相場の資料整理をしていた団体のメンバー S 氏に出会い、それをきっかけに再び相場の道へ戻ったのだ。

S 氏から投資法を学んだ K 氏の成果は、素晴らしいものだった。相場の世界で返り咲いた K 氏は、林輝太郎に連絡し、S 氏を伴って久しぶりに会いに来たのである。

この投資法を本物と認め、興味をもった林輝太郎は、両氏の説明を何度も聞き、へたな改良をせずにそのまま引き継いだ。かねてより質の高い投資クラブをつくる構想をもっていた輝太郎は、細部までルールがしっかりしていて実行しやすいこの投資法を通じて、会員相互の努力と協力によって売買技術を向上させながら、資産を増やすことを目的とする集まりとして、「F A I クラブ」を創設したのである。

FAIクラブの概要

①全員が平等

家元制度のように、上層部が下部から搾取する制度ではない。メンバー全員が平等で、個人の売買技術向上のために相互扶助する。

②金銭の貸し借りをしない

株の世界ではカネがすべてなのに、トラブルになってはじめてカネの話になるものだ。FAIクラブでは、金銭以外でもメンバー間の貸し借りは禁止、「えんぴつ1本でもいけない」と定めている。

③メンバー相互の信頼関係

メンバー同士、自分の売買について話をするが、プライバシーを他言するようなことはしない。この信頼関係がしっかりしているから、質の高い研究活動が実現するのである。

④月に1回の銘柄選定委員会

毎月、銘柄選定のためのミーティングを行う。複数の実践者が意見をぶつけ合って議論する結果、独りよがりになりがちな相場に対する意見が修正され、投資法に沿ったよい銘柄が選定されることになる。

5. 投資クラブについて

「FAIクラブ」は投資クラブである。しかし、一時的に流行した「投資組合」としてのクラブではない。毎月メンバーが集って銘柄選定のミーティングを開いているが、売買は完全に個人個人で行う。

資金を集めて全員の総意で売買をする、といった運用はしないし、一部の有志でそれを行うことも禁止している。

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

相場は、極めて個人的な感覚で行う作業であり、緊張と孤独の中で決断を迫られるストレスから逃れることはできない。多くの投資家は、このストレスから逃避する目的で寄り集まる結果、トラブルになる。

あくまでも孤独な作業を継続して質を高めるために、悩みを話したり、議論を交わす相手を求めるのが正しい道だ。

投資家が、儲ける術を学ぶという同じ目的をもって集まったのに、トラブルでイヤな思いをしたり、長続きしないようではつまらない。もし、投資クラブや研究会を発足させるなら、F A Iクラブのよいところを手本にしてもらいたい。

①具体的な目的、立場を明確にする

②責任の所在を明確にする

③実際の運用は絶対に個人で行う

以上が基本的な注意事項である。F A Iクラブが1984年6月に発足して34年が経過し、1988年から2000年までの12年間は選定銘柄ゼロだったにもかかわらず、きちんと活動を継続してこられたのは、F A I投資法の優秀さのみならず、状況の変化に惑わされず視点を変えなかった姿勢が大きかったのである。

買い銘柄のない期間も毎月欠かさずに例会を開き、「まだ下げが続きそうだ」と12年間言い続けながらも、F A Iクラブの存在も活動内容もいっさい変わることがなかったのだ。

6. 実行する投資法はひとつだけ



経験があり、目のつけどころもよいのに儲からない——そんな投資

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

家の共通点は、“落ち着きがない”ことである。仕掛け方も逃げ方も知っているのに、実際に手がけるとチグハグな売買になってしまい、取れるところが取れず、わずかな失敗から大きな損を生んでしまう。

例えば、薬品株が好きで「薬品株ならけっこう利益が取れる」と考えているのに、ハイテク株が動けばそれに目を奪われ、新規公開株が話題になれば手を出してしまう。

薬品株が得意ならそれを専門にして、薬品株に仕掛けるチャンスがないならば休むのが正しい。休むというのは、ポジションを持たず、しかし値動きを追いながら自分の出番をジッと待つことだ。そして、出番が来たときには躊躇なく出動するのである。

F A Iクラブでは、下げ相場の期間ずっと「休み、またはカラ売り」の方針を貫いた。そのカラ売りも「次の出番（買い場）をジッと待ち、正しく見極めるため」との位置づけを強調した。

例えば、最近流行のデイトレードは、日計り（^{ひばか}＝その日のうちに反対売買する）、またはごく短期の値動きを細かく取っていく取引法である。これについて、「毎日、何かしら儲かる銘柄を特別な方法で見つけて利益を出す」と解釈する人も多いが、とんでもない間違いだ。

やはり、対象銘柄を絞るか、やり方を絞った（必然的に一定範囲に銘柄が絞られる）うえでデイトレードに臨み、取れないときにはジッとガマンする。つまり、ちょっと仕掛けてすぐ手仕舞ってしまうか、最初から手を出さないか。そして、1カ月＝約20日の営業日の中で「取れるべき日」が2日か3日あり、そのときにしっかりと利益を確保していくのだ。証券会社のディーラーを含め、勝っているデイトレーダーは例外なくそうである。

7. 好き嫌いで選べばいい

前述したように、相場は個人が感覚的に行うものである。だから、「合う、合わない」「好き嫌い」でやり方を決めればよい。

「どれがいちばんよいか」という絶対的な答えはなく、自分自身の考え方に沿ったやり方を用意し、それに矛盾しない売買を実行するのが、売買における正解なのだ。

自分が好きになれそうで、長く続けられそうな投資法を選び、その投資法を自分の専門、自分の持ち味にすることで、技術として確立していくのである。

F A I 投資法が自分に合わないと思ったら、手を出さないでほしい。そして、F A I 投資法の長所・短所、あるいは組み立て方を参考にするととどめ、自分の好きなやり方を探すべきである。

ひとつの流儀を継続して行い、一定の水準に達すれば、ほかの売買法について何も知らなくても、「相場の名人」なのである。また、ほかの売買法に移行しても、身につけた基本はそのまま通用する。

だが、中途半端な気持ちで複数のやり方を同時に行っていたら、何も身につかないどころか、ダメな姿勢が助長されるだけだ。

決して難しいことはない。自分の好きな方法を選べばいいだけだ。それが株式投資で成功する、最も大切な第一歩である。